生徒の意欲を喚起しながら、ねらいに迫る

新しい指導を考える会

1 はじめに

『少年の日の思い出』の指導構想を練る場合、学習の中心を回想場面にもっていくことが多い。確かに、少年の日に犯してしまった苦い思い出はこの作品の大きな山場であり、「僕」の心情描写を追っていくことで、主題に迫っていける。今までの自分の授業経験を振り返ってみても、ちょうを盗み、つぶしてしまった「僕」の自責の念、最後の場面で自分の標本を粉々につぶしてしまったその意味などに焦点を当てて、回想場面における「僕」の心情を追っていく授業を展開してきた。

しかし、この作品は、冒頭部分が主題に迫るための一つの大きな鍵になっていることも事実である。この場面では、「僕」が大人になってもその思い出を心の傷跡として引きずっていることが容易に理解できる。また、第三者的な人物である「わたし」を登場させて、その人物にすべてを打ち明けることから考えても、今まで誰にも話すことができなかった「客」の切ない気持ちが手に取るようにわかる。

さらに、この作品の場面構成や展開から見ても、現在の場面から過去の場面へと巧みに展開していること、語り手が前半と後半とで変わっていることなどを考えると、冒頭部分がこの作品で果たす役割や効果がいかに大きいかがわかる。

そこで、学習の山場を冒頭の場面に置き、まとめの学習では、その場面に戻って読みを深めさせる授業展開を提案したい。「僕」が長い間語ることのできなかった気持ち、この場面でつらい過去を語った時の気持ちはどんなものであったのかを考えることで、主題に迫ることも可能だと考えたからである。

最終的には、この心情をもとに、冒頭の場面の続きを創作する活動を通して、一つの額縁式の作品として締めくくりたいと考えた。

2 冒頭部分の提示方法の工夫（指導の構想）

冒頭の場面は、回想場面で読み取ったことがより深められる部分である。この場面をいつ、どのように生徒に提示し興味づけるか、また、回想場面と関連づけてどう扱うかが重要となる。今回は左記のねらいに合わせて、この場面を三回扱うこととした。

1 冒頭部分のみを読んで、回想場面への興味づけを行う。

まず、冒頭部分のみを示し、初発の感想を求めたところ、次のような点が挙がった。

・「客」の過去が一体どんなものなのか、気になった。
・「自分の思い出を自分でけがす」というところから、子どものころやってはいけないことをしたのだとわかった。
・「わたし」と「客」の会話が、とても暗い感じがした。
・この後に出てくる思い出が、きっと嫌な思い出なのだろうと想像できた。

生徒は、表現や情景描写から感じ取れることを頼りに、後半の場面を予想している。ここから回想場面を読むための橋渡しができ、スムーズに後半場面に入っていくことができる。また、作品の構成や展開、語り手が変わることなどにも気づく生徒が多くいるであろう。

2 一読後、冒頭部分に戻り、優れた情景描写をとらえ、この場面の効果を考える。

生徒の感想にもあったように、暗い過去を際だたせる要因が、冒頭部分の情景描写によく表れている。そこで、暗いイメージを感じさせる表現をすべて挙げさせる。周囲の描写だけでなく、ここでは、次のような「客」の動作や会話をとらえてくる生徒もいると思われる。

・「もう、結構」と言った。
・その思い出が不愉快でもあるかのように、彼は口早にそう言った。
・残念ながら自分でその思い出をけがしてしまった。
・彼は……緑色のかさをランプに載せた。

この作品を、冒頭の場面に戻して、「客」が語った後の続きを考えるためには、この時点で優れた情景描写を押さえておくことが必要である。

また、冒頭の場面の効果を考えると、次の点が挙がった。

・大人になった今でも、心に大きな傷跡が残っていることがこの場面でわかる。
・別のだれかを登場させることで、嫌な思い出が語れるようになったのではないか。

このように、冒頭の場面のもつ意味を各自が感じるだろう。冒頭の場面を回想場面と比較をすることで、さらに見えてくることもあるであろう。

3 再度冒頭部分に戻り、学習のまとめとして読み深めを行う。

この作品の学習のまとめとして、再度冒頭部分に戻って、主題に迫るための読み深めをする。その際、次の点を学習課題として提示する。

（1）「客」が、なぜ少年時代のつらい思い出を「わたし」に語る気持ちになったのか。

補助発問として、「つらい過去は本来だれにも話したくない気持ちがあるはずだが……。」と生徒にたずねてみるのもよい。生徒は、自分の体験と照らし合わせて考えたり、自分を「客」に置き換えて考えたりすると思われる。

（2）「客」が、少年時代のつらい思い出を引きずっていることがわかる表現を挙げてみよう。

これにより、一人一人の読み取りが掌握でき、ここまでの学習の定着状況を把握することもできる。ここでは、丁寧な読み取りができるよう、学習プリントを用意し、次の「書く」活動につなげられるように工夫したい。

すでに回想場面を学習した後であるため、冒頭部分に書かれている現在の場面に戻ることによって、「客」自身がしてしまった罪の重さや行為の切なさなどが理解でき、より深い読みができるであろう。過去を知ることによって冒頭部分の読み取りだけでは見えなかったものが見えてきて、最初の読み取りを

再点検できると考えられる。

もちろん、最初に感じたことと学習後に感じたそれとは違ったものになると思われる。生徒は、過去の出来事をすべて知った上で、「客」の気持ちに沿ってまとめることができるであろう。（次ページ上段　学習プリント1参照）

3 生徒がねらいを明確にして学習に取り組むために

冒頭の場面に戻る意味を学習者である生徒自身がわからなければ、主体的な学習は成立しない。つまり、この場面がどんな意味をもっていて、そこを学習することで何が明確になるのかを理解させる必要がある。そのためにも、学習課題の提示方法や学習過程などを工夫しなければならない。また、抵抗感なく学習活動に向かえるような工夫も必要である。

■生徒の声からスタートし、ゴールの学習課題を提示する。

作品の結末が自分の収集しているちょうを粉々につぶすところで完結しているため、生徒から「終わり方がどうも不完全で、もやもやした感じが残る。」「なぜ、この場面で終わるのだろうか。」という声がいつも挙がる。そこで、この声を生かして、最初の段階で、ゴールとなる学習課題を提示してはどうだろうか。「最後には冒頭の場面に戻して、大人になった『僕』の心の内をとらえよう。」「『少年の日の思い出』を、どんな気持ちで大人になるまで心にしまっていたのかをとらえよう。」というねらいを示し、作品全体の読み取りに入っていくこともできる。

■冒頭の場面に戻って、作品の続きを考える。

学習の最終的なまとめとして、「書く」活動を取り入れる。「書くこと」を通して、主題により迫っていけたらと考えたからである。

ここで大切なのは、「書く」活動そのものを重視するのではなく、その活動を通して、生徒の読みの力を高めていったり深めていったりすることである。冒頭の場面の続きを考えることによって、「客」の奥底に潜んでいる心情、情景描写の巧妙さを感じ取ることができると思われる。

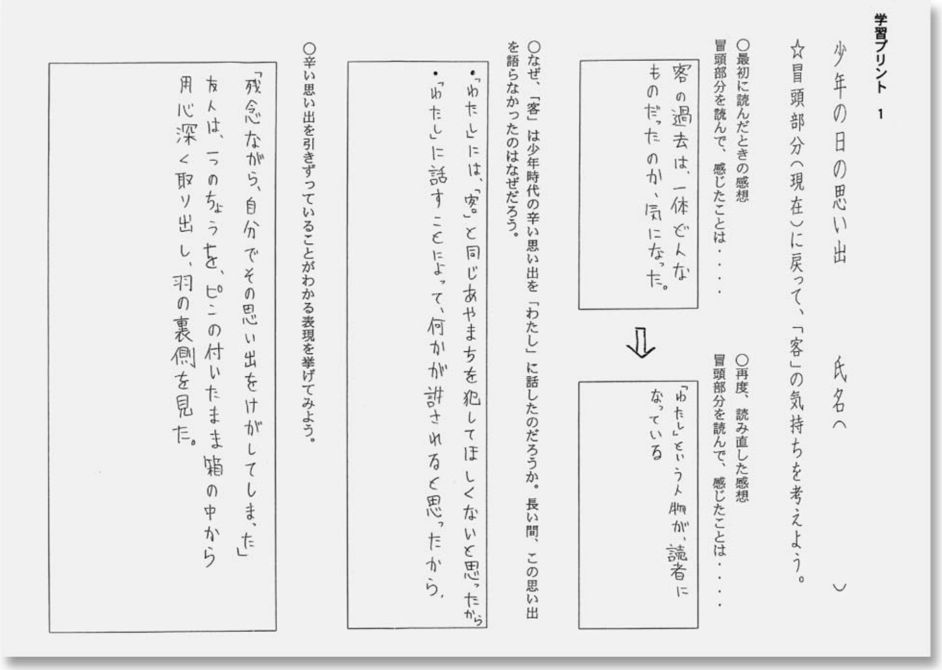
思い出を語っている「客」の、この時の気持ちを想像させてから、創作に入りたい。また、教師側から全体に、どんな点から考えていくか例を示すとよい。次のような示唆が考えられる。

・「客」は、つらい思い出を語った直後、最初に口に出した言葉は何だろう。
・「客」と「わたし」がどんな会話を交わしたか、予想してみよう。
・「客」の気持ちを考えて、動作や行動を入れると効果的である。
・周りの様子（情景描写）も加えるとよい。

ここでは、「書く」活動に抵抗を示す生徒もいるため、個々の生徒への支援が必要であろう。「書く」までの学習段階をしっかり組み立て、創作活動に臨ませることが大切になってくる。

生徒が書いた作品は、作品集を作ったり、友だち同士で交換して読み合ったりすることで、互いに交流し合う場を設けるとよい。（次ページ下段　学習プリント2参照）

学習プリント1


学習プリント　1

少年の日の思い出　　氏名（　　　）

☆冒頭部分（現在）に戻って、「客」の気持ちを考えよう。

○最初に読んだときの感想
冒頭部分を読んで、感じたことは・・・・

客の過去は、一体どんなものだったのか、気になった。

⇩

○再度、読み直した感想
冒頭部分を読んで、感じたことは・・・・

「わたし」という人物が、読者になっている

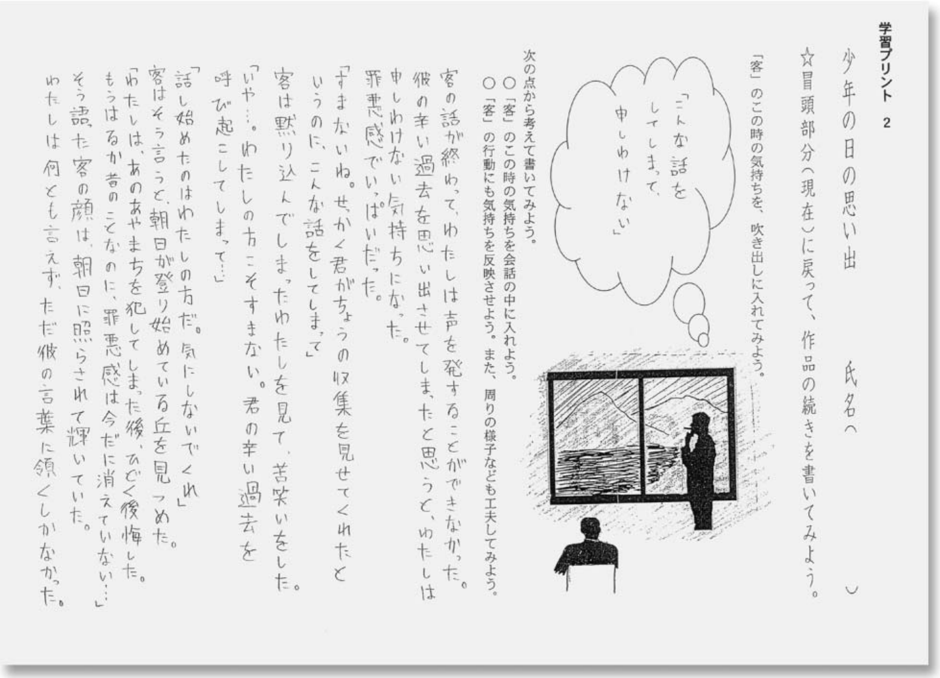
○なぜ、「客」は少年時代の辛い思い出を「わたし」に話したのだろうか。長い間、この思い出を語らなかったのはなぜだろう。

・「わたし」には、「客」と同じあやまちを犯してほしくないと思ったから
・「わたし」に話すことによって、何かが許されると思ったから。

○辛い思い出を引きずっていることがわかる表現を挙げてみよう。

「残念ながら、自分でその思い出をけがしてしまった」
友人は、一つのちょうを、ピンの付いたまま箱の中から用心深く取り出し、羽の裏側を見た。

学習プリント2



学習プリント　2

少年の日の思い出　　氏名（　　　）

☆冒頭部分（現在）に戻って、作品の続きを書いてみよう。

「客」のこの時の気持ちを、吹き出しに入れてみよう。

次の点から考えて書いてみよう。
○「客」のこの時の気持ちを会話の中に入れよう。
○「客」の行動にも気持ちを反映させよう。また、周りの様子なども工夫してみよう。

客の話が終わって、わたしは声を発することができなかった。彼の辛い過去を思い出させてしまったと思うと、わたしは申しわけない気持ちになった。罪悪感でいっぱいだった。
「すまないね。せっかく君がちょうの収集を見せてくれたというのに、こんな話をしてしまって」
客は黙り込んでしまったわたしを見て、苦笑いをした。
「いや…。わたしの方こそすまない。君の辛い過去を呼び起こしてしまって…」
「話し始めたのはわたしの方だ。気にしないでくれ」
客はそう言うと、朝日が登り始めている丘を見つめた。
「わたしは、あのあやまちを犯してしまった後、ひどく後悔した。もうはるか昔のことなのに、罪悪感は今だに消えていない…」
そう語った客の顔は、朝日に照らされて輝いていた。
わたしは何とも言えず、ただ彼の言葉に頷くしかなかった。